

川崎病に関する疫学的研究

柳 川 洋
 柴 田 茂 男
 永 井 正 規
 大 村 外 志 隆
 中 村 好 一
 竹 内 せ ち 子
 川 崎 富 作
 草 川 三 治

本年度は以下の2つの課題について、川崎病の疫学的研究を実施した。

1. 第7回川崎病全国調査成績

第7回全国調査において、調査を依頼した施設（全国の小児科併設100床以上の病院）は1,940カ所、そのうち回答をいただいたのは1,470施設（1982年11月末現在）で、回答率は75.8%であった。

結果を要約すると以下のとおりである。

①初診患者についてみた本病の年次別発生数（概数）は、1981年6,300例、1982年1～6月12,000例、計18,300例であった。1979年には6,867例の発生があり、前年の2倍の流行であったが、1982年には1～6月の6カ月間だけで12,000例に達し、今までに経験したことのない大流行となった。②死亡は1981年16例（男9,女7）、1982年34例（男22,女12）、計50例で、致命率は0.3%と前回の0.4%よりやや低い。③性別では、男10,400例、女7,900例で、男女比は1.3:1となり、差がやや縮小した。④初診患者の月別発生数をみると、1981年12月から患者は急増し、1982年5月には月間3,600例の発生がみられた。この値は1979年3～5月にみられた発生よりはるかに多い。⑤初診患者について計算した年齢別罹患率のピークは、過去4カ年と同じく、生後9～11カ月である。⑥都道府県別発生数（1982年11月末現在の概数）および人口10万対の発生率（1981年1年間合計の率、1982年は1～6月の率）をみた。まず1981年の初診患者について9歳以下の人口10万対年平均発生率をみると、山形が他府県より著しく高く104であった。次いで高い県は福岡

60、奈良58、宮城55などとなっていた。低い県は青森16、福島、宮崎、鹿児島各19であり、全国平均34となっていた。

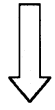
次に1982年についてみると、石川132、静岡126、長野111、茨城109などが高く、沖縄8、青森24、山形26、熊本30などが低かった。全国平均は65で、前年の約2倍の値であった。

2. 宮古島における川崎病流行調査

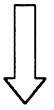
沖縄県宮古島において昭和53年1月～56年12月の4年間に発生した川崎病患者14例を対象に家庭訪問を中心とした疫学調査を行い、患者住所地の地理的分布、家庭環境、既往歴、患者同志の交流、気象条件などを調べた結果以下の成績を得た。

①14例の患者のうち9例は昭和55年12月16日～昭和56年1月18日の1カ月間の発病で、患者発生は地理的に偏在し、隣接の離島からの患者数は皆無であった。多くの患者は相互に地理的または社会的な関係がみられた。しかし一部の患者はほとんど外部と接触していなかった。また患者の住居環境はさまざまで共通点はみられなかった。②各種気象条件を比較した結果、異常発生のみられた時期に一致して平均気温、最高気温、最低気温が低くなっていた。

以上の結果から川崎病の発生原因を疫学的に矛盾なく説明することは困難であったが、上気道感染症の可能性が示唆され、気象条件と密接な関係を有することが推測された。今後さらに小地域単位のきめ細かな疫学調査を実施する必要がある。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



本年度は以下の2つの課題について、川崎病の疫学的研究を実施した。